

任国あんなこと！こんなこと！

● 土壌雑感

(高遠宏会員)

南米パラグアイ東部のブラジル国境パラナ河沿いには、赤色のテラロサと呼ばれる肥沃な土壌が分布していて、この地域は開発が進み広大な大豆畑となっている。

この畑の中にポツンと大木が立っているのが所々で見られる。これは森林を伐採して畑地化する時に残されたパラグアイの郷土樹種で“家具や彫物の素材”として貴重なラパチョ(Lapacho)である。この地域も以前は広大な天然林であったところで、現在は見渡す限り広大な大豆・小麦の畑となっている。肥沃な土壌であるが、作物の連作、耕起などが続けば、土壌の衰退、土壌侵食が進行することになる。パラグアイの法律では、農地開発時には河川周辺林は残すことが義務づけられているが、ほとんど守られていない。現在、大豆の不耕起栽培により、土壌保全対策が行われているが、とくに河岸部分については植生の保護・育成を早急に積極的に実施しなければならぬと思う。雨期になると、河川の水が褐色になり、膨大な量の肥沃な土壌の流失が至る所で見られる。

東南アジアの熱帯降雨林地域(ブルネイ)での調査では、ジャングルの湿地で樹の根や倒木の上を歩かなければならず、この泥炭湿地林の中で穴を掘って土壌の断面を観察していると、すぐに水位が上昇して来てバケツで水を汲み出さなければならなくなる。また観察している自分の足元が沈下してくるので短時間で調査を終えなければならぬ。このような湿地でも直径80cmから1m以上で樹高30mから50mのアラン(Alan)の大木が大きな板根や支持根に支えられて立っている。このような場所にはニシキヘビがいる。また、熱帯降雨林の中では、樹の種類が多く、1ha位の狭い範囲では同じ樹種を見つけことが困難なほど、種が多様化しており、貴重な地球の宝庫として、大事にしなければならないことを痛感している。



● 21世紀になって交通信号機が設置されたネパール(石原平八郎会員)

2003年10月にカトマンズに着任し、日本大使館に挨拶に参上した際、首都カトマンズは「21世紀になって初めて交通信号機が取り付けられた所です」との話が公使よりあった。最貧国の一つで生活環境は大変厳しく、市内の空気汚染度は世界有数で、歩く時はマスクをした方がよい状況でした。

2001年から2002年にかけて初の系統だった交通信号機システムが、環状線内に10箇所設置され、交通の緩和と排気ガスの削減が図れるスムーズな交通状況の確保により、大気汚染の軽減に貢献するシステムが日本の援助で完成したとの事です。電気供給が不安定な為、太陽光システムが取り付けられています。そして都市交通管理の専門家が派遣され、交通指導が行われていますが、未だ黄色は進めの状況です。

また、車の警笛が煩い事も特徴の一つでしょう、トラックなどの後ろには大きく「ホーンブリーズ」と書かれているのをよく見かけます。ですから、車の騒音と警笛との相乗効果で、車の中に居ても頭が痛くなることもある位です。警笛は途上国のバロメーターだと言う方もいましたが、ケニアなどでは相手に威圧されたと言って喧嘩になる所もあります。

そして車両の区分が詳細に分かれているのも面白い所です。ナンバプレートが白地に赤でナンバーが書かれているのは官庁車両、赤と紺地に白は大臣が使用する車両、黄色地に黒は公社・公団、水色地に白は外交官、赤地に白は一般車両、黒地に白はタクシー・バスなどの営業車、緑地に白はホテル等の観光営業車両、白地に黒は先程の環状線道路と環状線外だけを通行できる営業車両等と8つに分類されていますが、理由は不明です。たぶん税金ですかね。



● パキスタンの結婚披露宴

(加藤博通会員)

ムガル帝国の王都であったラホールはパキスタンの京都とも呼ばれる緑に包まれた古都である。ここに有るパキスタン政府中小企業振興局(SMEDA)に出席中、結婚披露宴(ワリマ)に招かれた。

招待状に記された18時、最高級ホテル、パールコンチネンタルホテルに行くとも誰もいない。会場の明るく映えるボールルームにはただ椅子が並んでいるだけである。1時間も経つとぼつぼつ集まりだし、花婿花嫁と思わしきカップルもご到着、三々五々参会者と歓談、招待主の局長、花婿の父がたった一人の外人小生を花婿の親族に紹介して回った。

パキスタンでは両親が認め両家の同意がなければ結婚はできないという。昔の我が国が生きている。

そのうち花婿花嫁はステージ上のソファに座り次々と参列者グループと写真撮影をしている。別に改まって花婿花嫁の紹介、祝辞があるわけではない。集まった人たちはコーク片手に勝手に話をしているだけである。

しかも参列者はやたらに男が多い。盛装のご婦人方はごく少数だ。聞けばこの日は花婿側の披露宴で花嫁の親族以外は全て花婿の関係者とのことで納得。花婿側の披露宴は別に開かれ、1週間毎日披露宴が続くこともあるという。花嫁側の披露宴はさぞ華やかであろう。

そのうち20時半ごろ、カップ一杯のスープが配られてお開きである。

現在パキスタンは節約下、華美な行事や仕来たりはご法度とのこと、それではご挨拶をして帰ろうと思ったら、局の仲間から「帰ってはいけない。これから市内のレストランに移り宴席がある。あなたは今日の主賓だから当然出席しなければ」といわれた。

めいめいそのレストランに行くので貸切の宴席も別に席が決められている訳でもなく、適当に知合い同志でワアワア夜更けまで歓談の渦であった。

もちろん堅苦しい挨拶もアルコールも抜きであり、文字通り披露宴であった。



● UFOの存在を信じますか?

(金木克公会員)

皆さん、UFOを信じますか? 私はUFOの存在を信じています。

最初の遭遇は、昭和48年ボリビア国サンタクルス支部サンファン事業所勤務の時に、UFOと思しき物体に出会いました。その時の光景は今でも鮮明に脳裏に焼き付いております。週末の夜、我が職員宿舎で職員の送別麻雀をしていた時、突然窓枠に青白い閃光が走ったと同時にドカーンと爆発音が響きわたった。我々4人は一瞬、サンファン農協が経営する飼料工場が爆発したのではないかと思ひ直ぐ様ジープに乗り込み、約300メートル先の同工場に向かった。途中、診療所前の幹線道路脇で数名の人がワイワイ騒ぎながら上を見上げていたので、我々もジープから下りて視線を向けると、そこには青白い大きな物体が垂直に、途中から橙色へと変色し、星空の下に消えていったのを見て、皆異口同音に「あれは一体何だったのだろう」と、摩訶不思議な気持ちで再びジープに乗り込んだ。飼料工場に行ってみると翌段通り操業が行われていた。

翌日、昨夜の事がニュースに取り上げられていないか、新聞・ラジオ・TV等に気を付けていたが、残念ながら“現場で観た者のみぞ知る”で完結した。

2度目は、支部勤務に配置替えになった昭和53年、サンタクルスの町でUFOに遭遇した。週末、家でラジオの音楽放送を聞きながら、うとうとしていた時、突然、音楽がストップし男の声が興奮気味に流れてきた。その声の内容は「コペータが南の空に飛来中」と何度も繰り返していたので、家族揃って2階のベランダに行って南の空を見上げると、何とコペータ(鳳)ではなく4-8機編隊の円盤型の物体が飛来しているではないか、正に空飛ぶ円盤だ。時間的に数分間、消えたり表れたり飛行が続いていたと思う。当時、サンタクルスの人口は約23万人と言われていたので、少なくとも数万人の人々がこの情景を目撃されたものと思います。

翌朝、プレゼンシア紙(地元で一番購読者の多い新聞)の一面に写真入りで昨夕の「OVNI(UFO)飛来」の事件が掲載されていた。

この当時、私の頭の中ではUFOの言葉そのものが理解されていなかった。それから日本に帰国して数年後、民放テレビでUFOの特集番組がやたらと放送されているのを見て、私が見た光景と相通じるものがあったことから、UFOの存在を信じる事となった。

編集後記

会報3号にして記事が自然に潤沢に集まるようになり、仲間うち学級新聞の域をようやく脱した感がある。シンポジウムの講師になる候補会員も目白押しであることがわかった。ブース展示のカリスマ説明員も現れた。また、県国際課の研修員の同行ボランティアに2名の会員が快く引き受けてくれ、高い評価を得た。盛り沢山であったことが会報の編集にはずみをつけた。(谷保)

JICA帰国専門家連絡会かながわ会報 第3号

発行 2004年4月
発行者 JICA帰国専門家連絡会かながわ(JECK)
事務局 谷保 茂樹 (e-mail: Stanih@aal.com)
横浜市青葉区青葉台1-3-9
株式会社ティーエーネットワーキング内

編集委員会 中之蘭賢治(代表幹事)
佐藤満寿哉、鈴木千明、物部宏之、谷保茂樹
株式会社 横浜リテラ (URL: <http://www.yokohamalitera.com/>)
(e-mail: litera@crocus.con.ne.jp)
横浜市戸塚区上矢野町2039-2